

第2分科会 自主活動

子どもたちの自主的な活動と学習を、どの
ように保障しているか

① 分散会

I. はじめに

討議課題をもとに討議の柱を立て、子どもの変容、教職員の変容、地域の変容、これからの展望について4本の報告を軸に話し合った。また、2日間を通して「差別をなくす当事者として何ができるのか」、「自分にとっての自主活動は何か」というテーマで討議、交流を進めた。

II. 報告および質疑討論の概要

—報告1—②

「先生、話せるってやっぱりいいですね」
(熊本県人教)

—主な質疑と応答—

奈良 報告者以外の人(担任など)のかかわりはどうなっているのか。

報告者 担任が動けていない。自分もどう動けばいいかというモデルを示すことができなかった。適応指導教室や学習会での様子は伝えているが、担任と浩太をうまくつなげることはできていない。

香川 地域人権教育指導員の吉山さんはどのようなかかわりをしてきたのか。

報告者 吉山さんがいてくれたからこそ、浩太に対して様々なアプローチをすることができた。吉山さんが集会所に連れてきてくれたり、自分とつなげてくれたりした。吉山さんの存在はとても大きかった。

三重 浩太と深い人間関係を築けるようになったきっかけは何だと思うか。

報告者 好きな趣味が一致していた。最初は共通の趣味の話から始まった。一緒に勉強を進めていく中で、どうやって楽しく学んでもらうかということをずっと考えてきた。その関係をつくるときにも吉山さんが色々と仕組んでくれた。

広島 なぜ4月にすぐに家庭訪問をすることができなかったのか。

報告者 泗水での出会いまでは自分の中に差別意識があった。勝手にムラの人イメージを作っている自分がいた。そんな自分の気持ちを見透かされているのではないかとこの思いがあっけなかった。でも、行ってみてお母さんから「差別が今もある。だから会って話したかった。」と言われた。待ってくれていたんだと感じた。

熊本 今回のレポート検討の時からお母さんもかかわってくれた。浩太が学校に行くということがどういうことなのか自分たちも考えさせられた。親や家族の願いをうけとめて、それをつないでいくことが大事なんだと思う。

熊本 報告者の中で部落とは何か。部落差別をどう考えているのか。

報告者 部落差別はしないけど、人ごとっていう立ち位置に自分はずっといた。色々な差別をしてきたと思う。そんな自分に気づかせてくれたのがムラの人との出会い。かかわっていく中で差別をしない、許さない生き方を知った。こんな生き方をしたいと思った。差別をなくす仲間として一緒に頑張りたいと思っている。

—報告2—④

学び続けること (埼玉県人教)

—主な質疑と意見—

兵庫 外国籍の子は特別の教育課程が認められているが、埼玉はどんなシステムで動いているのか。

報告者 外国籍の子どもが4、5人いる状況でも取り出しは週1回くらい。なかなか日本語を指導できる人材もみつからないことが課題。ペペさんについては、近隣の市に日本語の指導ができる人がいないか探したいと思っている。

福岡 日本語指導をしているが、まずは現状をたくさんの人に知ってもらうことが大切だと思っている。日本語指導の実態や人数が足りていないという現状、子どものニーズ、学校ではこんな支援ができる、そんな状況を知ってもらうことが大切。学校やさまざまな人たちとかがわりあって、やりとりしながら広めていきたい。

熊本 武さんは自分の状況をどう考えているのか。

報告者 薬をもらう理由はわかっている。自分が困っている症状を軽くするために病院に行っていることもわかっている。武さんは、自分のことをわかってほしい、困ったと感じていることをどうにかしてほしいと思っている。

兵庫 困った子は困っている子。困っていることをひもとして、支援することがその子の幸せにつながると思うがどう考えるか。

報告者 文子と出会って、自分自身の差別意識に気づかされた。今は、子どもが現在必要としていることを教えるだけでなく、将来や進路を見据えて、何が大事なのかを考えるようになった。子どもの側に立って、将来を見据えて困っていることを解消していきたいと思っている。

奈良 「課題を抱えた子は手がかかって大変」という自分自身の差別意識に気づくことができたのはどのようなきっかけがあったのか。

報告者 支援学級の文子さんが長縄をしたいと言ってきたときに「えっ!!」と思った自分がいる。でも、子どもたちが一緒に練習を始め、そのかかわりの中でクラスの子どもたちの優しいかかわりを見た。子どもの変容を目の当たりにしたときに自分自身の差別意識に気づいた。子どもたちの姿から、共に過ごす経験がすごく大事なんだという視点を学んだ。昔は課題とかきつい部分を取り除くために何かをすることが苦痛だったが、今はそれを楽しんでいることができるようになったことも自分の変容だと思う。

一報告3-③

学校における交流学習及び共同学習を通じた障がい者理解

～小さなきっかけが生徒を大きく成長させる～
(香川県同教)

一主な質疑と応答一

熊本 様々な体験や学習をしているが、それだけで終わってはいけない。どんな取組を今後考えているのか。

報告者 単発のかかわりではだめだと思う。だからこそ、生徒のかかわり続けたいという思いを大事にしたい。さらに、同年代だけでなく、支援学

校だけでなく様々な年代とのかかわりを増やしていきたい。

奈良 障がいのある人のものまねをするなど、障がいのある人をバカにする世の中の風潮をどう思うか。

報告者 差別が自分事としてとらえられていないから起こることだと思う。目の前の課題に向き合えるように教員は仕掛けていきたいし、困っている人がいたら自然と助け合えるような関係を築いていきたいし、差別が残る世の中の空気を変えていきたい。

神奈川 どうしていいかわからないから障がいのある人とかわらないように・・・そういう考え方が日本の中にある差別の現実。この意識を変えるためには教員の責任は大きい。この実践の先のゴールはどんなイメージをもっているのか。

報告者 お互いが対等な関係でかかわり合うことがゴールのイメージ。様々な人権課題を解決できるように、目の前にある課題に立ち向かっていけるように、それぞれの発達段階に応じて取り組んでいきたい。

広島 疑似体験をさせるだけでは差別を助長することにつながるのではないか。子どもたちが障がいのある人の気持ちに寄り添っていけるように事前、事後にどんな取組をしているのか。

報告者 体験をさせただけではいけないと思う。だからこそ、体験させた後にはしっかり振り返りをするし、なぜこういうことをやるのかという思いの部分もちゃんと伝えていきたい。そして、教師集団としてもその意味をきちんと学んで臨みたい。

一報告4-⑤

「がい国との豊かな出会い、気づき！みんなちがってみんないい！」～多文化共生教育～
(奈良県人教)

一主な質疑と意見一

東京 外国にルーツのある方の人権をテーマに学校で様々な取組をしているが、教科の学習との関連はどうなっているのか。

報告者 人権教育は全教科の中で行っていくという意識でやっている。それぞれの授業の中で特

別な取組をするのではなく、人権という視点を実践の中に入れるようにしている。

鳥取 調べ学習は大事な学習だと思うが、インターネットには差別を助長する内容もある。その点をどう考えるか。また、報告の「がい国」の「がい」がひらがなになっているのはなぜか。

報告者 情報を活用する力は大切。学校全体で取り組んでいきたい。外国という言葉が国語辞典で調べたら「よその国」と書いてあった。自分の中では「よその国」という意識ではなく、身近な国という意識があったので、ひらがなにした。

熊本 報告の中で「差別に負けない強い心」を育てたいとあったが、悪いのは差別をする社会であり、世の中。負けない強い心を育てるのは必要なのか。

報告者 差別の現実は今すぐ変わるわけではない。世の中を変えることは必要だと思うが世の中が変わるまでに差別に負けてほしくない。自分にも被差別体験があって、その体験があるからこそ「負けない心」は必要だと思っている。

熊本 A、B、Cは外国にルーツのある子だが、外国にルーツがあることでいやな思いをしたことはないのか。

報告者 子どもたちからはポジティブな発言が多かったからこそ、今はそういうことはないと思うし、差別がないようにアンテナを巡らせながら実践をしていかなければならないと思っている。

福岡 保護者からBさんの問題行動に対して差別発言があったと言われたが、どう対応したのか。

報告者 そのときは、Bさんの問題行動について注意しますというふうに話した。しかし、差別発言についてはうまく言うことができなかった。

奈良 うまくいかなかったときにどうしたらいいのか、それに対応できるシステムを作っていくこと、相談できるシステムをつくっていることが大切。共に動ける組織をつくっていきたい。

福岡 うまく返せなかったときは、どういう気持ちで言ったのかをきちんと確認して、その事実から地域啓発などにつなげていけるといいと感じた。

Ⅲ. 総括討論およびまとめ

熊本 取組が取組で終わってはいけない。取組をただけでは何も変わらない。あたりまえをあたりまえで終わらせない感覚が必要だと考えている。自分たちの行ってきた実践をもう1回みなおしてほしい。

三重 日々の教育活動を当事者抜きで考えていないかを確認することが大切。知識を身につけることは必要だが、知識だけで終わってはいけない。

熊本 子どもたちは色々なものを背負いながら生きている。だからこそ、子どもの事情に思いを寄せ、子どものくらしを知っておかなければいけないと思う。子どもの暮らしのどこに差別があるのか、そんなことを整理しながら今後の実践につなげたい。

香川 言葉のもつ差別性について考えてほしいことがある。研究会でよく「座って失礼します」という発言があるが、車椅子で生活している人にとって座って話すことは失礼なことなのでしょうか。こういう感覚を持ち続けていくことが人権感覚を磨くことなのかと考えた。

奈良 人ごとを自分ごと。自分も人も大事にしていけないといけない。そう思える集団を作っていきたいし、一人ひとりが人権を守られる学校づくりを進めたい。

新潟 教員は具体の差別を指摘し合うのが弱い。我々自身の差別性を問い、差別が起きたときにはどうするのか、何をしていないといけないのか、そんなことを相談しておかないといけないと思う。

新潟 生きていくのは子どもたち。こちらであらかじめすべての答えを用意してはいけないと思う。子どもたちが生きていけるような力をつけていかないといけない。

報告者 出会いがとても大切だと思う。自分の中にあるものを掘り出して、次に向かっていく力になっていく。仲間がいることの大切さを感じた。

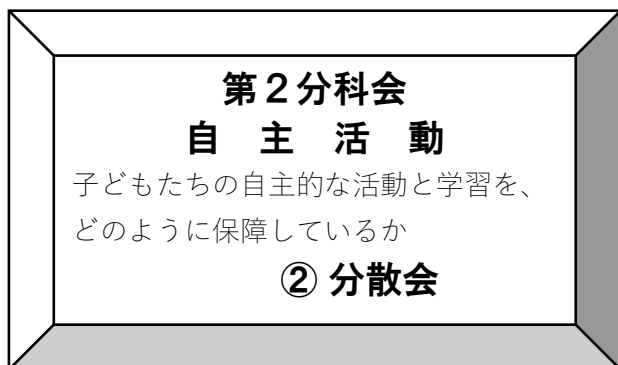
報告者 今回の報告でみなさんと出会って、刺激を受けることがたくさんあった。自分自身が何かを仕掛けていかないといけないと強く思った。今は、子どもが変わっていく姿を見るのが楽しい。かかわっている子の先（卒業後）も見届けていき

たい。

報告者 知らないことがたくさんあることを実感した。この事実を子どもたちに気づかせていけないといけないと思った。自分自身、仲間を増やしながら取組を進めたい。

IV. おわりに

4本の報告から、私たちは、職場や地域で人とどうつながっているのか、地元の人権課題にどれだけ学んでいるのか、目の前の子どもたちに仲間のどんな生活を伝え、共有させているのか、そしてそのことを反差別の人権学習としてどう構築しようとしているのか、ということが問いかげられた。報告には、実践者と子どもたち、保護者、地域などとの「確かな出会い」があった。その出会いから「人と人との確かなつながり」が築かれていた。「つながり」の中で、実践者が自身と向き合い変容していく姿があった。各地域での取組や推進体制などには違いはあったが、どの取組にも差別をなくすためには「かかわり続ける必要性がある」ということを確認することができた。今大会で得たエネルギーを、そして課題を各地に持ち帰り、「差別をなくす当事者」として何ができるかを考え、次の実践につなげていきたい。



I はじめに

分科会基調は、討議課題をもとに、水平社創立100周年の年、創立の中心的役割を果たした青年たちの出身地、奈良での全人教大会に参加された皆さんの期待を感じながら提案された。学校・学年・学級集団での仲間づくり、異学年集団活動や児童会活動、総合的な学習の時間、文化祭、解放学習会に集う子どもたちがつながる・つながろうとする活動を通して、集団がどのように成長し

ていったか、その中で、活動を進める私たちが、どの位置に立って実践をしているのか、差別の現実は何を学び、子どもたちの立ち上がりにつなげているのかを明らかにすることが提案された。

II 報告及び質疑応答の概要

ー報告1ー⑤

「自主活動における自主の価値を考える」

(奈良県人教)

ー主な質疑と応答ー

大分 自由・自主・自立の校風とは実際どのようなものか。

報告者 本当に自由な校風である。具体的には、生徒からの提案による校則などの変更がある。校則変更は、まずは生徒会で検討し、職員会議で内容をもむ。これまでの大きな校則変更として、制服の廃止、染色・パーマ禁止をなくしたことなどがあげられる。染色・パーマについては、中学生はまだ早いので禁止、高校生は自由にした。また、ピアスは他人を傷つける可能性があるという理由で現在も禁止されている。

奈良 Aのような生徒が育つ環境とはどのような環境か。また、Aの周りの他の生徒はどう変わっていったか。

報告者 個性がバラバラで、学校のスタンスは自由。学園祭でのAの発表を聞いて同級生も手伝うようになった。また、在学中は何もしていなかった生徒が東北に進学し、現在、後輩の東北での活動をコーディネートしている。いろいろなところでつながっている。

大分 生徒は自主活動をどのようにしているのか。

報告者 ひとつにしぼって入るものでなく、並行していろんな活動をしている子もいる。集まったメンバーで時間や場所を決めて活動している。

大分 校則の変革はどのようなことから始まったのか。

報告者 生徒会が中心となって、校則を守らない子がいる、守らないのが悪いのか、きまりがあつていないから守らないのかということから始まった。当時、染色・パーマの禁止について、生徒

にアンケートとったりして、数年かけて検討された。制服の廃止については昔過ぎてわからない。

奈良 2010年の女子大附属中等教育学校の卒業として、報告を聞き、改めて母校の魅力に気づかされた。自分も生徒の自主性を育てたいと思うが、どのような点に注意されているのか。教員が前に出すぎるということに注意されているが、共通理解はあるのか。

報告者 「他人の権利を侵害しない。時間をうばわない」を共通の基準としている。自由と無秩序（わがまま）は違うことを生徒に教えている。

奈良 改めて、活動内容を知った。染色・パーマなどの校則について、議論・討議を経て変更が認められるという点で、伝統的に自由の素地があると思う。勤務している学校では自主性が育ちにくいと感じている。新教育課程となり、総合的な探究などで、どのような探究を展開するのか、しているのか。そして、自主活動との関係はどうなっているか。

報告者 探求も自主活動も根っこは同じ。相手から話を聞きだす、相手に伝える姿勢、つまり「対話」が重要だと考えている。活動をするなかでは意見の対立をどう解決するかが大切で、それは、対話してということだと考えている。

一報告2ー⑥

「日田地区解放学習会」（大分県人教）

一主な質疑と応答一

大阪 Aのお母さんに「ごめんなさい」と言わせる社会がおかしい。解放学習会をすすめて、当事者にエネルギーを付けることが大切。しかし、「差別する側」に力を付けていかななくてはいけないのではないか。周りの生徒にどうつなげていったのか。

報告者 差別が残っている社会は、私も含めて大人の責任。大人はもっと真剣に取り組まなければならない。そのような大人の姿を見て生徒は、自分が強くなる方法しかないのではないかと感じると思う。また、Bのような地区外の生徒の参加を増やしていきたい。

奈良 差別と闘っていく畑を耕していかなければならない。「寝た子を起こすな」ということに

ついてはどう考えるか。差別をなくすアプローチをどうすすめているのか。

報告者 人権教育になって同和教育を行われなくなってきた。中途半端な向き合い方がきつい。解放新聞が家に届いていたら（部落だと）わかる。自分がその子のことを考えて本気でぶつかっていくと生徒はわかってくれる。私も自分も解放されると楽になれる。私は、「起こす」ことを基本と思っている。差別に向き合う生徒を育てていきたい。

大分 部落外への解放教育、BとAとの関係はどうか、教員へのアプローチはどうか。

報告者 AはBにまだ立場宣言はしていない。Aもどれくらい自分の立場を受けとめているかはわからない。ただ、Aは母が受けてきた差別によって悲しい気持ちになっていることに対する憤りが中心的な感情で、自分自身のことに関しては、これから考えていくのではないかと思う。Bは、Aの立場について、うすうすは分かっていると思う。他の教員には、人権講演会やLHR、研修会などの情報を伝えて働きかけていて、特に若い教員が興味をもって学習している。若い教員には研修会や解放学習会に参加して、積極的に取り組んで欲しいと思う。大分県では小中学校で学習会を行っている地区もある。

大分 部落差別のことで私も涙が出る。なくしたいという思いをもって関わる先生をどう育てるかが課題。以前は先輩教員が伝え、先輩に憧れて育っていった。今はレポートを書いて伝える方法で仲間を作っている。

奈良 長尾先生の熱い思いが伝わってきた。今は人権教育に先生たちも熱がなくてうまくいっていないと思う。生徒たちが本音で語り、つながるためにどんな手立てが必要なのか考えていきたい。

1日目の総括討論

大分 「教えこむ」ではなく、自主的な学びが問われる。（奈良の報告の）Aの自主活動までの学びはどのようなもので、どうすれば、Aのような生徒を育てられるのか。学年の構成が男女60人

ずつというのは、自由に反するのではないか。

大分 (奈良の報告の)のAの変わり目を整理すればどうか。また、(大分の報告の)Aの変わり目があるのか、変わりつつあるのか。

報告者(奈良) 気軽なかかわりから継続的なかわりになったAの背景には、興味を持ったことに対してとことん探求できる環境がある。そして、答えのない、答えの出ない問題にチャレンジする素地もある。道徳の中で部落差別はしてはいけないという教育はしているが、自主活動に選ぶ子はいない。学校ではAに続く生徒を育てるために、卒業生の話を書く場を作るなど対話を通じて世界を広げる、出会いの場を作るなどの工夫をしている。学年の男女構成については、検討が必要で、教職員でも論議を続けている。Aの変わり目は、①フクシマの現実を本気で捉え、②実際に行って活動し、③その輪を横にも縦にも広げたことにあ

報告者(大分) 自分ができていないことは活動を広げること。これまで、自分の責任で一人できてきたが、もっと多くの人に甘えておけばよかった。自分の転勤により、新しい後任者も一人で、なかなか難しい。大分では「取組より苦しみ」と言っているが、苦しみの中でもできていることとして、Aは、小学から中学にかけて荒れていたが、高校では落ち着いている。母が「地区のこと、Aを生むまでのことを話してから、とても優しい。ケンカをしなくなった」と言っている。狭山差別への取組も真剣。HRでの取組としては、人権HRに向けて職員研修をしているが、若手の先生が積極的に取り組んでいる。今後の展望として、運動体の人も連携して、親世代を集めて学習会を行いたい。

協力者 子どものころの経験(学習)が親になったときの思いにつながり、いきている。部落差解消推進法では、当事者だけではなく、まわりへのアプローチを求めている。

報告者(大分) 地区外の子が学習会に来ている場合も、その子がなぜここに来ているのかということをおお切にしたい。自分の思いが言えてほっとする場である。今、Bにアプローチしている。ク

ラス経営の視点と同じで、きびしい子を中心に考えるのと同じである。

大分 ある地区では、年に2回、解放子ども会として呼びかけている。中学校で、教職員集団が全校生徒に人権を学ぶ会に行かないかと呼び掛ける。高校の学習会で、差別事件など調べ学習をして出会わせている。また、親世代は立場宣言をしたが、その子どもにはさせていない。外から知らされる危険がある。

大阪 地区の中でも様々な流出入がある中で地区の子をどう定義するかはむずかしい。事前学習で水平社のことを学んだ子ども会に参加する子どもたちが23名、本日、水平社博物館を見学に行っている。子どもが起きるきっかけになるかもしれない。地域の人と意図的に出合わせることで、仲間として今後の自主活動につながるのではないか。

—報告3—⑦

「よりよくつながり よりよくわかる」

児童の育成

(徳島県人教)

—主な質疑と応答—

神戸 Bさんのあいさつ会社(係)の立ち上げ方について、全校ダンスは例年の取組なのか、単級学級で苦労したことは何か。

報告者 5年生のときに映画会社がタブレットで動画を作るなど、学級を明るくする係活動を自由にやって楽しんでいた。引き続き取り組み、漫画会社や新聞会社、映画会社、あいさつ会社が提案された。あいさつ会社は他の子が声をあげたが、おとなしいBさんともうひとりが手を挙げた。全校ダンスは、例年はなかったが、1学期の6年生のダンスがとても評判がよく、自信がついて、団結力がついて、全校を巻きこんで楽しいことしたという話の中で、運動会の全校ダンスに取り組んだ。曲決め、各学年の隊形、振り付けまで全て6年生自身が行った。曲決めでは、多数決で17対1になったが、1の子が頑固で譲らず、メリットデメリットを話し合っ、最終的に1人の方の曲にみんな移ったということがあった。多数決で物事をだけでなく、友だちの意見をきちんと聞き

入れて、柔軟にできるようになって、集団としての成長を感じた。振り付けを教えに1～5年生まで分かれて指導して行くなかで、教えるってむずかしいとか、うまく教えられなくて悔しかったからまた教えたいとか、たくさん経験ができてよかった。5年生のときは、意見がまとまらない、言い争いが絶えない、気に入らないことがあると教室から飛び出すAさんなどがいるクラスだった。6年生で担任し、荒いところや目につくことがあるが、見方を変えると、その子たちの個性やよさであるのとらえ、またそれをおもしろいと感じ、思いをもって取組をするなかで、自分なりにそこっていいところだと伝えることを続けた。5年生のときより、ひとつの方向に向かっていくという自覚がうまれたと感じる。

福岡 きつさを話し合い出し合えるクラスづくり、固定化された人間関係をかえる取組は。

大分 ABCDさんが出てきたが、クラスの中で一番きつい状況にある子はだれか。

報告者 6年生として、リーダーとして自覚して活動する中で悩みを共有することはあった。ふりかえりでも、Bさんは、「6年生を通して親友ができました。」と書いた。活動する中で弱音を吐いたり、きつさを共有したりして、親友を作っていたように思う。新型コロナに感染して卒業式に参加できなかった友だちのために、後日午後3時に全員で参加して卒業式ができたことも、新型コロナのきつさを共有した行動だったと思う。固定化された人間関係については、担任として、子どもを否定しない、受け入れる姿勢で接してきた。2年生の頃から仲が悪い2人が、全校ダンスの後、修学旅行で同じ班になって活動し、一緒に下校するような日も出てきた。今年の中学校の文化祭では、このふたりに仲間が加わってお笑いを披露したと聞いている。一番きつい状況の子はAさんで、両親の離婚後、母親のもとで暮らしていたが、母親が再婚のため、2年生から父親に引き取られて転校してきて、祖父母が中心に育てられている。家庭環境で満たされないところがあって、それが行動として出ている気がする。心のケアをしていかななくてはならないと向き合った。父

親が仕事で忙しいので、身の回りの世話や学校のことは祖母が中心。私がAさんの野球の試合の応援に数回行ったことがあり、そのとき父親が来ているので、父親のAさんを思う気持ちは伝わっているのではないと思う。Dさんは母親がパニック障害で、父親がひとりで子育てをしていて、自分の意見がなかなか言えない子だった。若あゆ班活動で自分の意見を友だちが聞いてくれて自信がついて、全校ダンスでは振り付けを提案して取り上げてもらい、これからは自分の意見を言っていきたいと、行動がかわってきた。

徳島 昨年度まで一緒に勤めていた。地区を抱える学校で、私はこの学校の出身で地区に友だちがいる。荒れなどもあり、なんとかしたいという思いもあって教師になった。法切れ後、当時の先輩の主事が、一軒一軒丁寧に家庭訪問して、「自分たちでやっていけるから大丈夫」という思いで学習会をやめた。私自身、部落差別もあるが、ヤングケアラー、一人親家庭の問題など、どの子にもスポットを当てていく人権教育を進めていくべきだと思う。

大分 大分は人権教育という形になったが、がたがたになってしまった。黒人差別の問題、障害者の問題についてもばらまきにしかない。自分を解放するところまで突き詰めていないから。なぜ部落差別の問題を中心に置くのか、この問題は1970年代から、億単位の人たちが関わり続けて、差別とは何か、自分を解放せんがためにやっていかないとだめだろう、そこまで突き詰めて考えてきた。部落差別の問題に向き合った人が他の人権問題にも向き合っている。だから少なくとも大分県では、部落差別を毎回勉強するようにしている。

大分 Aさんに対しての先生方の気付きやサポートは何か。静かなBさんがあいさつ会社をなぜ立ち上げたのか。運動の得意でないCさんがなぜダンスに積極的に関わっていったのか。そこへの先生方の気付きやサポートがあつての集団づくりレポートだと思う。

報告者 Aさんは、暴言を吐いたり教室から出て行ってしまったりすることは、自分のいやな面と

して気付いていたと思う。6年生になって、Aさんを受け入れて励ましながら頑張っていたが、ある先生に暴言を吐いたとき、私とAさん2人で向き合っ、またいやな自分に戻るんじゃないかと論じた。Aさんにはリーダー的な友だちのサポートがあったり、他の先生とも情報共有をしたりして、委員会でも成長したことを認められるようになった。Bさんは、学校を明るくしたいという思いをもってたんだなという新たな面を教師が発見したケース。サッカー部に所属し休み時間もサッカーに夢中、作文では祖父の家業の蜂蜜農園を継ぎたいという強い意志をもっていることに気付かされた。Cさんは、私と話をしたときもすぐ涙ぐむ性格だったが、徐々にコミュニケーションがとれるようになってきた。みんなで団結してやったという経験があまりなくて、1年生と仲良くなる会でのダンスの完成度がすごく高くて、その経験が運動会の全校ダンスの取組につながったと思う。そのダンスがきっかけとなり、ふりかえりで、Cさんはこれから絶対に行事は休まないと書いていて、Cさんの変化、高まりを感じた。

－報告4－⑧

「仲間とのつながりのなかで」（大阪府人連）

－主な質疑と応答－

大分 偏見や決めつけは地域からか、生徒から発信されるのか。生徒自らの課題とは何か。

報告者 被差別部落がある学校で、小小連携、小中連携の中で偏見は薄まってきているが、2小学校の規模の違いなど、偏見などがやはり存在している。校区では、家庭・地域・学校が連携し、総合「いまとみらい」で、学年に合った課題を設定し、生徒が参画し、これらの解消のために取り組んでいる。中学校紹介の取組は、お互い知らない小学校から来るといふ不安を解消するために、生徒の自主性を尊重して取り組んでいる。

大阪 1980年代に高校進学率低下がみられ、これが大きな課題となっていた。学力保障を中心に就学前から自己実現に対する取り組みをスタートさせ、それに高校も加わってきた。課題の先送りをしない、就学前に取り組むべきこともある

として、0～18歳までを「つらぬく」教育を行っている。放課後学習教室は、各クラス数名ずつ参加している。

大分 Aは地区生なのか。家庭背景はどうか。

報告者 Aが地区出身であるとは把握していない。クラスにもいない。母は仕事が忙しくて家にあまりいない。父はサッカー関係の仕事をしている。Aは、学校のことは母、サッカーのことは父に相談している。

三重 地域とはどこまでをさすのか。その地域の中だけの発信になりがちになるのではないか。

大分 学級通信を使いながら、子どもどうしをつなげているのがうまい。

報告者 学校としてできることは、通学してくる小学校区の生徒たちの地域・小学校とそれ以前の保幼と中学校卒業後に進学する高校との連携での取り組みである。身近な地域の連携からさらに広げて考えられるような生徒を育てていくことが目標のひとつである。

三重 同和教育をこれまでしっかり取り組んできているからこそ報告のような地域との連携がしっかりできると思う。これをしっかりと受け継ぎ、特に若い人たちに実践力を身につけて頑張っ

て欲しい。
大阪 若い教員が、熱心に取り組んでいてとても頼もしいと思う。

III 総括討論

インターネットでの誤った情報で差別される問題について、アウトィングの危険性や相談できる地域の方や学校の重要性が指摘された。また、2002年の法切れ後、同和教育活動や運動が縮小されたが、それは差別がないのではなく、見えない、見なくなっているのではないか、教職員がアンテナをもっと高く張って、部落にルーツをもつ子どもをしっかりと見ていく必要があることが指摘された。しんどの立場の子どもたちと、その子どもたちのカミングアウトを自分の生活と重ね合わせて受け止める仲間とのつながりや絆を深めること、つまり、将来にわたって支えあえる人間関係の構築の必要性や居場所づくりの大切

さが語られた。

自主活動について、子ども、保護者、地域の方、教職員が同じ思いをもった仲間として、一人の人間として活動するという理念についての確認があった。仲間づくりは子ども同士だけではなく、教職員集団、保護者、地域の方々、すべての人々がつながることが大切なことが語られた。

部落差別解消推進法をはじめとする差別解消三法が示しているものは、被差別におかれている人たちの周りの人が差別解消に取り組むこと。その理念を、教育や啓発の中でどう具体化していくのが、喫緊の課題。差別をなくす当事者、主体者としての自分が問われている。また、部落にルーツをもつ子どもに力をつけることの大切さ、若い世代に伝える大切さの指摘もあった。若い世代も情報を得て、人権教育を進めていく意志を伝えていただいた。